資料2

本陣等々力家の概要

1　本陣等々力家の主な特徴と文化資源的価値について

(1)概要

等々力家は江戸時代に松本城主がカモの狩猟に訪れた際の休憩場として利用され、「本陣」と呼ばれた。18c初頭には等々力村を含め計 11 村をまとめる組手代の役割を担った。現在の屋敷内には主な建物として長屋門、主屋、座敷、裏座敷の他に 6 棟の蔵(木倉屋は既に倒壊)が残る。

(2)市指定文化財「等々力家の長屋門」

屋敷構え北正面の長屋門は切妻造の平屋造りで、東西方向に長さは約 33m。昭和 13 年に罹災した際に西端部を約 9m撤去したと伝わっており、一時期は全長約 43mの規模だった。道路側に見える出格子窓は明治時代の造作で、これにより外観から華やかな印象を受ける。昭和 54 年、旧穂高町が文化財に指定(現在市指定文化財)。

(3)屋敷構えの中核と庭園

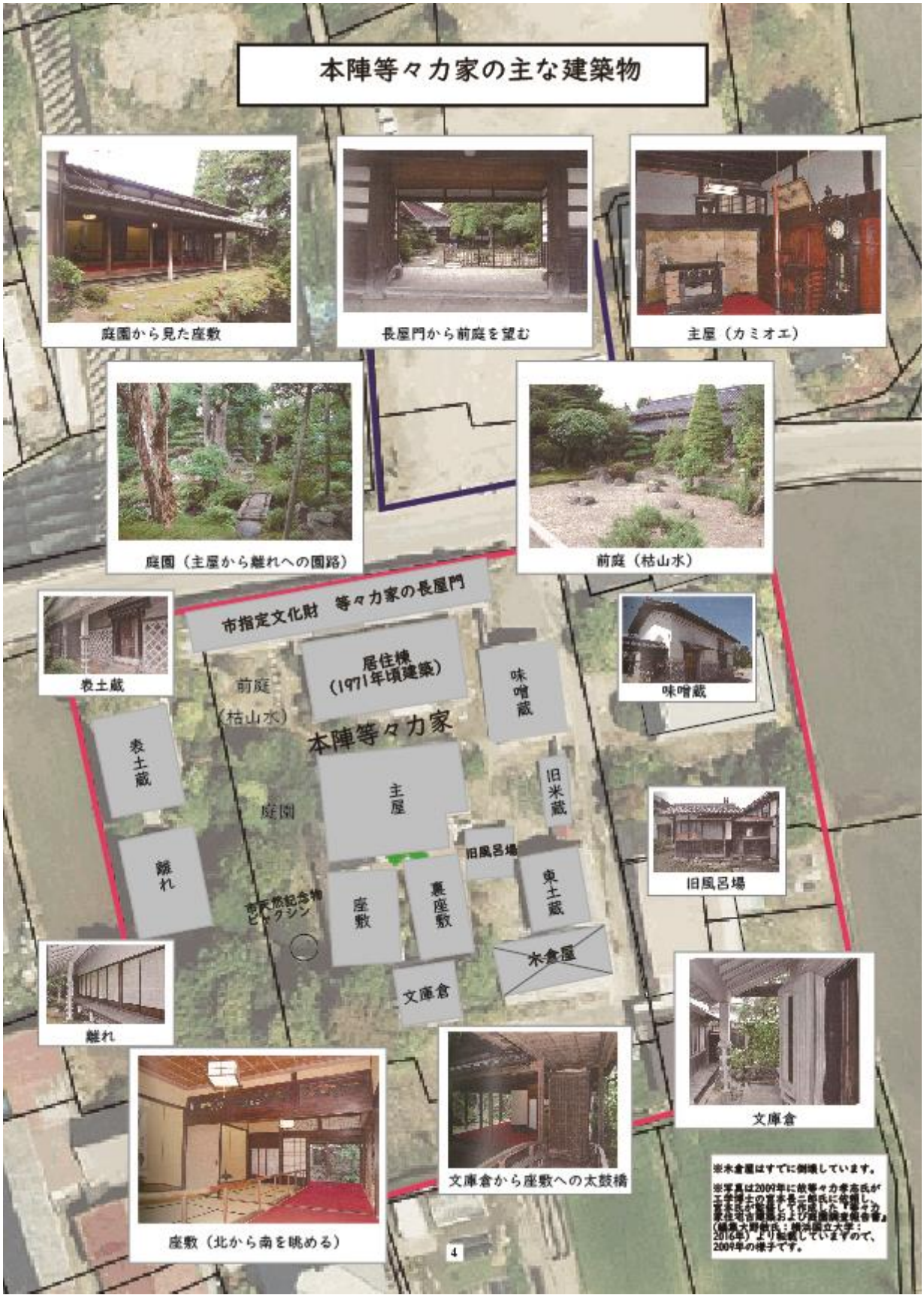
長屋門をくぐると、枯山水の前庭が広がる。さらに進むと主屋、座敷、文庫倉が続く。主屋と座敷の縁側からは水の流れのある庭園(現在は止水)を望むことができる。この庭園には松や百日紅、市の天然記念物(昭和 45 年指定)で樹齢 400 年前後と伝わる幹回り 2.93mのビャクシンなどが植えられている。文庫倉は屋敷構えの一番奥の南端に位置し、大切なものを収納する場であった。文庫倉と座敷は趣のある太鼓橋で連結されており、文庫倉を折り返し地点のようにして、裏座敷へと続く。一個人の住宅で二つの座敷棟を有する例は珍しく、座敷と裏座敷の間の空間は中庭である。裏座敷を除き、これらの長屋門・主屋・座敷・文庫倉の建築年は 18c末か 19c初期まで遡るとされ、水の流れる庭園を含めた景観は、本陣等々力家の中核をなし、藩主が来訪した最上層民家の姿を今に伝える重要な資料である。

(4)屋敷構えの東側と西側

屋敷構えの東側には、北から味噌蔵、旧米蔵、東土蔵があり、これら土蔵群は明治の前半に建築整備された(味噌蔵には明治2年の墨書あり)。反対の西側には、2棟の立派な表土蔵と離れがあり、屋敷の西側の重厚な景観を構成している。表土蔵は等々力家の土蔵の中で最も華やかで規模が大きい。離れの外観は土蔵風だが、内部は座敷となっている。建築年代は明治中期から後期とされ、近代和風建築の技法(トラス工法)を確認できる。

(5)まとめ

以上から、等々力家住宅は、指定文化財の長屋門だけでなく、他の建物と庭園も含めて、近世末から近代における生活の変化及び屋敷構えの変遷をたどることができる貴重な文化資源である。

(参考:2016 年　監修:宮本長二郎、編集:大野敏『等々力家住宅古建築および庭園調査報告書』横浜国立大学)

2 本陣等々力家の全体配置図